

【主催・共催・協賛会議報告】



主催・共催・協賛会議報告

◆ ICAT'98 参加報告

広田光一

豊橋技術科学大学 情報工学系

(Newsletter Vol.3, No.12)

本稿では、一般セッション発表について技術よりの立場から報告する。まず全体的な印象であるが、VRの基礎技術や応用領域が多様化していることを反映して内容にも広がりが出てきていると感じた。一般セッションはエージェント/芸術、モデリング/シミュレーション、デバイス、インタフェース、仮想世界、応用に分けられていたが、それぞれのセッションの中でも発表ごとに問題意識やアプローチがそれぞれに異なり興味深いものであった。

以下では、報告者が感心を持った発表についていくつかを紹介する。静力学を真面目に計算することで物体の挙動を計算する試み(都立科技大)は、物体の接触関係を状態遷移で表現し、各々の拘束状態での摩擦力を含む釣り合いを解くことで物体のとるべき位置姿勢を計算する手法を提案した。運動シミュレーションにおける離散的サンプリングの問題に関する指摘(東工大)は、比較的早い動作による仮想空間とのインタラクションにおける本質的な問題を分かり易い例題で明らかにし、その解決方法を示した。地面の凹凸を表現するデバイスの試作(ATR)に関する発表は、新奇なデバイスに感心をもつ研究者から注目を集めていた。残念ながら動作の様子についてのビデオでの説明はなく、今後の進展に対する期待を残した。

今年から一部のセッションがパラレルで行われるようになり、全ての発表を聞くことができなくなった。発表件数が多くなってくるとやむを得ないことであるが、セッション選びで迷った参加者も少なくないのではないかと感じた。

◆ ISMR'99 参加報告

清川清

郵政省通信総合研究所非常時通信研究室

1. はじめに

1999年3月9日～11日の3日間にわたり横浜パシフィコ会議センターにて開催された、第1回複合現実感国際シンポジウム(ISMR'99: The First International Symposium on Mixed Reality)に参加した。本シンポジウムは、当学会複合現実感研究会が主催する複合現実感分野に関する本格的国際会議である。共催のMRシステム研究所との協力により、記念すべき第1回シンポジウムは世界第一線級の研究者を集めた非常にレベルの高い会議となった。セッションの大半は基調講演3件を含む25件の招待講演およびパネルディスカッション1件が占め、豪華な顔ぶれが次々に最新の成果を発表した。講演以外には、一般参加のポスター発表(12件)、デモ展示(7件)の他、メディア・アート・ギャラリーにおけるアート展示やMRシステム研究所の見学ツアーなどが行われた。なお、参加者は日本、アメリカ、カナダ、フランス、ドイツ、韓国、フィンランドの7カ国からの約250名であった。以下にその報告を記す。

2. 基調講演

Henry Fuchs (UNC at Chapel Hill)、金出武雄 (CMU)、Paul Milgram (Univ. of Toronto) の3氏が基調講演を行った。Fuchs氏は、遠隔手術などの研究や最近のThe Office of the Futureプロジェクトに触れながら、複合現実感システムのための実シーンと仮想シーンの重畳表示手法の歴史と展望について概説した。

金出氏は、実空間の3次元計測に関して講演し、高精度レーザレンジファインダと、氏の提唱するVirtualized Realityを具現化する3D domeなどの最新成果を示した。レ